

おどもっど

子育て健やか教室

獨協医大病院小児科医カールテ

④



今高城治准教授

新型コロナウイルスは子どもの生活を一変させました。ウイズコロナ、ソーシャルディスタンス、分散登校、個食黙食、修学旅行・行事の自粛、長く続けられた子どもの

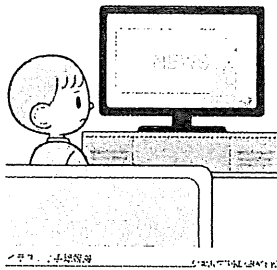
生活は、戸外から屋内、そしてゲーム・テレビ・交流サイト(SNS)に変化していきま。この2年半、仕事柄多くの子どもと話す中で、子どもの心の健康が著しく侵害された懸念を持っています。可憐な子どもの懸念は、コロナ禍に被せられ、ロシアによるウクライナへの軍事侵襲や安倍晋三元首相の暗殺事件です。

心の健康確保へ留意を

コロナ禍と恐怖映像

ロシアが侵襲して以降、崩壊したウクライナの映像が放映されない日はありません。SNS投稿はかなり衝撃的で、戦闘映像を加工した悪意のフェイクニュースも紛れています。安倍元首相の暗殺事件も然り、繰り返し放映される発砲シーンは目撃した人になりま。

今、誰もがコロナの不安を抱え、屋内生活を余儀なくされています。しかしテレビやSNSを通して心的負荷の強い映像を子どもが見る際は、十分な注意が必要です。児童精神学的に、幼い子どもにも刺激の強い映像を繰り返し見せてはいけません。小児期の体験が後の人生を左右する最大の要因となることは強調するまでもなく、決して大人が活してはなりません。



写真：手塚啓

現実から目をそらすことの批判も理解できますが、政治を理解する大人に比べ、知識が浅く精神的に未熟な子どもが恐怖映像を見せられることは、心的外傷後ストレス障害(PTSD)を発症するリスクにつながります。1990年8月の湾岸戦争、95年1月の阪神淡路大震災、2001年9月の米国多発同時テロ事件、

そして11年3月の東日本大震災など、いずれの後もメディアの衝撃映像を見た多くの子どもが、トラウマ(心的外傷)からPTSDを発症した社会現象が知られています。コロナ禍の子どもの心も必要に応じて、戦争や暗殺の真実を知らせなくてはならず、周囲の大人が心の安心を確保する必要があります。大人が自らできることは、ユース報道を通して、意識的・体系的に自己防衛的・恐怖映像から無防備な子どもを守るためにも、小さな子どもが不安になるメディア映像を繰り返し見せたり、絶対に避けるべきです。(獨協医大病院小児科准教授・今高城治)

「第3土曜日掲載」